

前書き

.....

先にお断りしておきます。この本には「例」以外の、便利な英語表現、文法、単語などは一切載っていません。英語の知識を学べるそういった類いの本は、もうすでに書店に山ほど並んでいます。

「使える英語」「日常英会話集」「ネイティブが使う表現」などの本を購入しても、それだけでは物足りなくなり、また別の良さそうな本を買う——ということを繰り返し、いつの間にか本棚には英会話の本がたくさん並んでいるという人も多いでしょうが、果たして本が増えるにつれて英会話力も向上しているのでしょうか？

英語をもう一度やり直したい、仕事で使いたい、話せるようになりたいと願う人に最も必要なものは、今の時代においては、そういった本ではないと私は考えています。

日本人の英語学習者にとっての深刻な問題は、語彙力や文法力などの知識そのものではなく、日本で英語を学んでいるうちに知らぬ間に身につけてしまった、英語を上達させる上で障害となっている悪い習慣 = 「英語学習の生活習慣病」を患っているということです。海外留学や英会話レッスンなどで、実践英語の習得を試みようとしますが、思うような成果が得られない人も多くいます。それは一度根付いてしまった受験勉強の習慣を捨てきれず、

英語に対する考え方や取り組み方を変えることができていないからです。

これから英語の勉強を始める人は、まずはどのように学んでいけばよいのかを学んでください。基礎から再挑戦したい人や、伸び悩んでいる人にとっても、学習法を見直す機会にしてください。そして、あなたの本棚に飾りとして並んでいる多くの英語の教材も有効に使ってください。

私が本書で伝えたいと思っていることは「英語ではこう表現します」といった「答え」ではなく、英語を使えるようになるための「学び方」です。これまでの悪習慣を断ち切り、あなたの英語学習に革命を起こし、英語を「知っている人」から「使える人」になってください。

本書が、英語を話せるようになりたい人の「英語学習の生活習慣」を改善し、快適な英語学習生活を送る手助けとなることを心から願っています。

※「英語学習の生活習慣病」は、実在する病気ではありません！

著者紹介

私には、他の英語の本の著者のような「〇〇大学卒業、〇〇大学教授」といった肩書が一切ありません。大学も行っていない高卒の人間です。英語はイギリスでの生活と独学で学んできましたが、語学留学をしていたわけでもありません。

私はレスリングを学ぶために1993年に初めて渡英しました。これは、しかし、オリンピックなどで見るものではなく、イギリスのランカシャー地方に伝わるキャッチ・アズ・キャッチ・キャンと呼ばれるレスリングです。オリンピックスタイルやプロレスの源流となるもので、産業革命の時代から1900年代前半まで人気を博していました。

当時は、インターネット普及前でしたので、外国の地方にあるレスリングジムの詳しい所在地など、日本で知ることはできませんでした。結局、町とジムとコーチの名前という情報だけで、無謀にも日本を発ち、ウィガンという町にたどり着きました。情報収集のために立ち寄った観光案内所で、自分の英語が通じないことに衝撃を受けました。係の人が話す英語が聞き取れず、紙に書いてもらいました。それを読むと、単語は知っていたつもりでも、文章全体の意味が入ってきませんでした。

【Are they expecting you? Catch a bus from bus station in centre

of Wigan to Aspull.】

「知ってる！ expect = 期待する。でも『あなたに期待していますか？』ってどういうこと？」

今思えば、このような典型的な使えない英語の覚え方をしていました。

これまで学んできた英語では通用しないことを、一瞬で痛感させられたので、さまざまな方法で勉強しました。観光ビザを駆使して日本とウィガンを往復して、合計2年半ほどこの町で過ごしました。イギリスでの経験と、自分の学習法でどんどん上達できると実感していたので、日本にいる間も、英会話学校に通うことはありませんでした。

2002年春より某英会話学校で教える立場となりましたが、やはりほとんどの生徒さんは長年にわたって染み付いた「悪習慣」を改善できないでいると感じました。

そして自らの学習法を紹介したく、2010年に「英語脳クリニックCATCH」を開校しました。既述の通り、私には立派な肩書はありません。しかし教室開校にあたり、何か信頼されるような宣伝文句が必要だと思い、TOEIC満点を目指しました。試験勉強は好きではなかったのですが、そのための正しい勉強をすれば必ず取れると確信していました。予定通りオープン前には目標を達成でき、看板などに「TOEIC990点満点講師」と書くことができました。

私が試行錯誤しながら学んできた学習法を、この本にまとめ上げました。学習に終わりはなく、私自身もまだまだ学び続けている身ですが、「学び方を学ぶ」ことの大切さをお伝えできれば幸いです。